

# ひょうごの遺跡

昭和61年3月1日発行  
兵庫県教育委員会  
社会教育・文化財課  
兵庫県埋蔵文化財調査事務所  
〒652 神戸市兵庫区荒田町  
2丁目1番5号  
Tel(078)531-7011(代)

〔題字 教育長 井野辰男書〕

## 終末期の群集墳

——西脇古墳群(姫路市西脇)——

西脇古墳群は姫路市西脇に所在する、古墳時代終末期の群集墳です。国鉄姫新線<sup>おおいち</sup>の太市駅より西へ約1.5km、南向きの山の斜面に線路をはさんで60~70基程度<sup>おも</sup>の古墳が点在しています。

今回、山陽自動車道の建設に先立って、その計画路線内に古墳群が位置するため、昭和60年5月中旬から、発掘調査を行っています。

西脇古墳群は、大津茂川が峯相山のふもとを通り揖保川を中心に形成された広い沖積平野へと出ていく、その根元にあたる部分に位置しています。西脇古墳群自体は、標高200m級の山の南斜面に分布しており、その南側にある丸山や馬山、桜山などにかこまれ、西脇から太市にかけては、小さな盆地を形成しているといえます。

『播磨国風土記』では、この地を行幸したという(もちろん伝説ですが)品太天皇(応神天皇)の言葉を載せています。「吾謂狭地此乃大内乎」(私は狭い土地と謂ったのにこれは大内ではないか。大内ではないかとは、入り口は狭いの、内は広いじゃないかという意味です。西脇・太市の地形を実によくいい表しています。

『風土記』には、各地の伝説のほか土地の地味についても記しています。太市(「邑智里」)は「中の下」です。『風土記』では地味を上中下九等分に分類してありますから、あまり肥えた土地だったとはいえないようです。

このような地味の悪さ=生産力の低さは、周辺に須恵器窯跡が数多く存在することと相まっ



調査区全景(左下から1、2、4、7、9、10 左上5、6、8、3号墳)



て、西脇古墳群に葬られた人々のプロフィールを推定する上でのヒントとすることが出来ます。

今回は、21基の古墳と2基の奈良時代火葬墓を調査しています。21基のうち、11基が無袖式の横穴式石室をもつ径10m前後の円墳、7基が径5～7mの小竪穴式石室を埋葬施設とする円墳、2基が組み合わせ式石棺を直葬している径5m以下の円墳です。各古墳の概要については表にしておりますから、それを参照して下さい。ここではいくつかのことがらを取りあげて解説します。

まず、古墳の分布状況を見てみましょう。1～10号墳は比較的まとまって存在しています。古墳のすそとすそがぶつかりあっているところもあります(例えば9号墳と10号墳)。これに対して11～13号墳は、調査区の東半分にかたまって位置しています。両者の間、約30～40mには古墳は存在しません。

1～10号墳と11～13号墳の間には地形的にみても、水みちにあたるところで、古墳をつくるには不適当な場所だったようです。しかし、9号墳と10号墳はかさなり合っています。8号墳に至っては3号墳を破壊して造っています。いくら土地の状態が悪いからといってわざわざ先に存在する古墳をつぶして、また古墳をつくるという窮屈なことをしている現象にはそれなり

の理由を考えなければなりません。

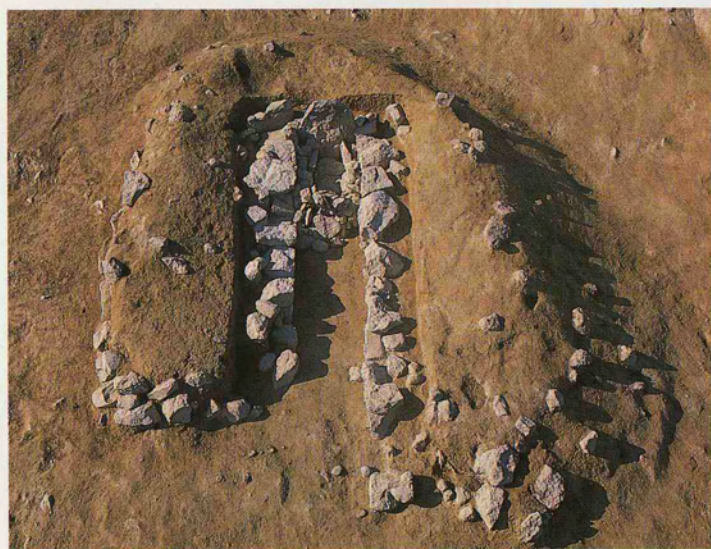
これは1～10号墳と11～13号墳が同じ銭取山南斜面に造墓を行い、一つの群集墳を形成しているながらも、2つのグループであること、そしてそれぞれの古墳をつくるスペースが限られていることを示していると考えられます。

同様のことは谷をへだてた古墳にもいえます。24～27号墳は谷の東向き斜面にあって若干東向きにまとまって開口しています。ところが、29～39・41・42号墳はこれまたまとまって南向き斜面に南向きに開口しているようです。おそらく2つのグループとしてとらえることが出来ます。

このようなグルーピングは、群集墳が支群、ときには小支群に分かれるという表現をします。複数の集団が限られた墓地を確保して何基もの古墳を造っていく、西脇古墳群はその姿を如実に示しているものといえましょう。われわれは一基一基の古墳を精査することによって、その名も知れぬグループの実像に迫っていくわけです。

西脇古墳群では、検出した横穴式石室をもつ古墳にはいくつかの注目すべき点があります。まず、無袖式の横穴式石室であることです。無袖式とは、横穴式石室の羨道と玄室の区別がなく平面プランでは長い箱形をしている石室を示すもので、原則として死者を納めなかった羨道

にまで、棺を入れて埋葬する例がふえる6世紀後半以降になると増加する石室です。無袖式の石室は7世紀に入ると急速に小型化してしまい最後には棺1つおくのがやっとというような小さなものになってしまいます。西脇古墳群では、全長7mから3m弱のものまで存在し、小型化する系譜を追うことが出来ます。比較的大きな石室には、石棺を内蔵しており、小型化すると石の棺台を置いて木棺を収納するようになります。



1号墳全景

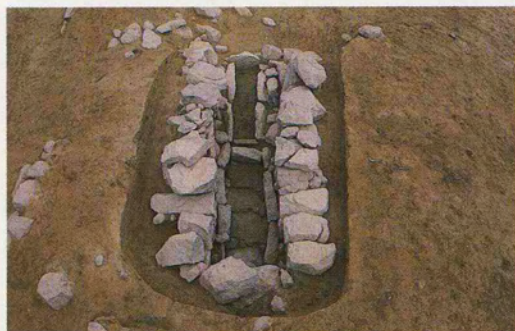




2号墳全景(西から)



3号墳石棺

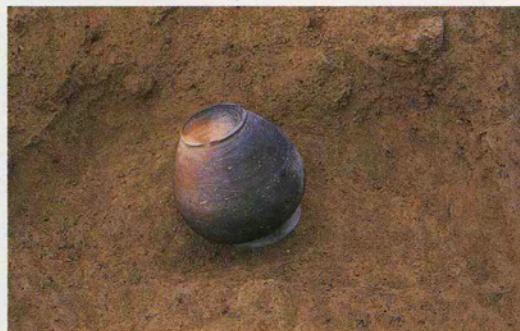


8号墳石室

小竪穴式石室は、7基検出され、うち10、12号墳では両小口の壁が残っており、規模が正確に計測できます。また、12号墳では、一部天井石が残っていました。小竪穴式石室は、群集墳の造営が、一般に終息する7世紀代に出現してくる一人埋葬用の石室です。宝塚市雲雀山古墳群や京都市旭山古墳群に類例があります。5号墳では、須恵器杯2個、台付き長頸壺、土師器杯を検出したのをはじめ、9・10号墳でも遺物が出土しており、小竪穴式石室の年代決定に重要な資料となります。

組み合わせ式石棺墳は2基検出しています。ともに半壊状態で、3号墳は8号墳周溝によって一部を破壊されていました。ともに年代を決定出来る遺物は出土していません。

横穴式石室、竪穴式石室をもつ古墳は、墳丘に列石をもっています。とくに、横穴式石室墳では上下2段に列石を巡らせており、平面的には極端に言えば、オタフク状の形となっています。4号墳では、列石のほかに石室前方部に新たに石を積み、墓道状の遺構を造っています。羨門より1m近く下がった部分より、約2m分新



奈良時代の火葬墓

たに側壁をつみあげているもので興味深いものです。

12号墳西側と13号墳南側で奈良時代の骨蔵器を検出しました。12号墳西側の骨蔵器は、口縁部をうち欠いた壺に火葬骨を入れ、須恵器甕の胴部を蓋にしていました。甕は磨滅がはげしく、日常雑器として使用された後、骨蔵器の蓋にされたものと考えられます。他方の骨蔵器は、皿(灰釉陶器か?)を地面に裏向けにして置き、その上より、骨の入った壺を上下逆にしてかぶせていました。骨・歯が残っており、年齢・性別を明らかにすることが出来ます。

群集墳の墓域内に火葬墓が造られるということは、群集墳の造営が終息し、奈良時代に入っても、同じ集団が同じ墓地を継続して使用していた可能性を示しています。1～10号墳に比べて比較的新しい時期に造墓を開始した11～13号墳を造営したグループは、他の支群が墓地の使用を停止した後も墓地を使用し続けていたと考えられるわけです。



## 西脇古墳群調査古墳の概要

概要 号墳	外 部 施 設				内 部 主 体			遺 物	時期
	墳形	墳丘規模	列 石	周 溝	主体部形式	主体部規模	組み合わせ式石棺等		
1	円 (楕円)	径約 9 m	上下 2 段に 巡らす	墳丘北側の 地山を若干 掘りくぼめる	無袖横穴式 石室	全長約 6.0 m 幅約 1.0 m 現存高 0.5~0.8 m	1 基、小口を 奥壁と共用	羨門部に須恵器杯 蓋 石棺内外に鉄鍬	7C 前半
2	円 (楕円)	長径約 12 m 短径約 9 m	同上	傾斜にあわ せ半円形に 地山を掘る	同上	現存長約 7.0 m 幅約 1.2 m 高 1.2 m	棺台	勾玉、馬具、須恵 器平瓶、杯蓋、耳 環 2、鉄剣他	7C 前半 最古?
3	円	径約 4 m		北から東に かけて浅く まわす	組み合わせ 式石棺	全長 2.5 m 幅約 0.5 m 高約 0.4 m	直葬		8号墳に 先行
4	円 (楕円)	長径約 10 m 短径約 8 m	上下 2 段に 巡らす	傾斜にあわ せ半円形に 地山を削る	無袖横穴式 石室	現存長約 4.5 m 幅約 1.0 m 高約 1.5 m	1 基内蔵、盗掘 をうける	石棺内より耳環、 棺外より平瓶、杯 蓋、杯身	7C 前半
5	円	径約 6 m	1段、墳頂部 周辺に巡ら せる	同上	小竪穴式 石室	現存長約 2.1 m 幅約 0.6 m 高約 0.7 m	棺台?	台付き長頸壺、須 恵器杯、土師器杯	7C 前半
6	円	未調査不詳	未調査不詳	未調査不詳	同上	蓋石現存		未調査不詳	5号墳より 新しい
7	円	径約 12 m	上下 2 段で 巡らす	傾斜にあわ せ半円形に 地山を掘る	無袖横穴式 石室	現存長約 4.5 m 幅約 1.0 m 現存高約 1.0 m	棺台 敷石	耳環、勾玉、ガラ ス小玉、杯身、平 瓶	7C 前半
8	円 (楕円)	長径 12 m 短径 8 m	同上	同上	同上	現存長約 2.7 m 幅約 1.0 m 高約 0.6 m	2 基内蔵、蓋石 あり	須恵器杯、平瓶、 須恵器甕を周溝で 破碎	7C 前半
9	円	不明	墳頂部周辺 に巡らす	墳丘北側の 地山を掘る	小竪穴式 石室	現存長約 2.7 m 幅 0.75 m 高 0.7 m	敷石	須恵器杯蓋 土師器	7C 前半
10	円	径約 7 m	同上	9 号墳を破 壊	同上	全長約 2 m 幅約 0.7 m 現存高 0.55 m		刀子、耳環	9号墳より 新しい
11	不明	不明	不明	不明	小竪穴式石 室残欠	不明	不明(敷石)	鉄鍬	不明
12	円	径約 7 m		半円形に地 山を削る	小竪穴式 石室	全長約 2.9 m 幅約 0.5 m 高約 0.8 m			不明 (7C 前半)
13	円	径約 10 m	上下 2 段に 巡らせる	傾斜にあわ せ半円形に 地山を削る	無袖横穴式 石室	全長約 2.60 m 幅約 0.9 m 現存高約 0.4~0.8 m	敷石 棺台	須恵器平瓶 短頸壺	7C 前半
24	円	径約 7 m	同上	北東西三方 は顕著に掘 る	同上	現存長約 3.40 m 幅約 0.7 m	2 基内蔵、小口 を共用	平瓶、杯	7C 前半
25	楕円	長径約 5 m 短径約 3.5 m		同上	小竪穴式 石室	現存長約 1.80 m 幅約 0.55 m	底石あり	耳環	不明 (7C 前半)
26	円	長径約 8 m 短径約 5.5 m	墳裾に巡ら せる	半円形に地 山を削る	無袖横穴式 石室	現存長約 2.60 m 幅 0.65 m	棺台	平瓶、土師器甕	7C 中頃
27	円	不明		不明	組み合わせ 式石棺	現存長約 1.90 m 幅約 0.45 m	直葬		不明
28	円	径約 6 m	上下 2 段に 巡らせる	半円形に地 山を削る	無袖横穴式 石室	現存長約 2.70 m 幅約 0.80 m		須恵器高杯	7C 中頃
40	円	径約 6.5 m		同上	同上	現存長 2.80 m 幅 0.75 m		耳環、鉄釘 須恵器杯・甕	7C 前半
41	不明	不明		墳丘南側の 地山を削る	小竪穴式 石室	不明	敷石		不明
42	不明	不明			?	不明		匙	不明
43	楕円	不明	上下 2 段に 巡らせる	半円形に地 山を削る	無袖横穴式 石室	現存長約 2.0 m 幅約 0.70 m	棺台	鉄釘	7C 前半



さて、長々と西脇古墳群について話してきました。では、西脇古墳群は一体どんな点で注目できるのでしょうか。読者の皆さんは、古墳がいつ、どうして造られなくなってしまうかご存知でしょうか。これは現在でもナゾなのです。古墳は4世紀にはすでに出現していて、群集墳は6世紀後半から爆発的に造営されはじめます。そして、現在までのところ、畿内では7世紀初頭になると群集墳はぱったり造られなくなると考えられています。専ら死者をいままでに造った古墳に押し込む追葬期がやってきたわけですから、群集墳のうちの一部は小さな石室(おそらく一人葬れば精いっぱい)の石室ではありますが)をもつ古墳を引き続き造っていきます。またこの時期に新しく群集墳を形成し出す古墳群が出現してきます。そして7世紀中ごろ、石室への追葬や小さな石室の造営もほとんど行われなくなります。一斉に古墳を造らなくなるということは、仏教思想のほかに土地制度を含めた政治的な動き、極論すれば、古墳造営禁止令的なものを考えるべきかもしれません。

7世紀初頭、そして中ごろの群集墳が造られなくなる時間の流れの中に西脇古墳群は位置し

#### 〈用語解説〉

- (1)播磨国風土記…風土記は和銅6年(713年)の元明天皇の詔によって作製された地誌です。諸国から郡郷の名の由来・産物・地味地形・伝承などが報告されました。出雲国風土記が完全に残っています。播磨風土記は常陸・豊後・肥前とともに不完全ながら現存しています。
- (2)終末期…古墳の時期を表現する一つの方法です。便宜的には、4世紀—前期・5世紀—中期・6世紀—後期・7世紀—終末期という関係になります。終末期は字義の通り古墳を造営しなくなる時期にあたります。群集墳は古墳時代後期後半、すなわち6世紀後半に全国で爆発的に出現しますが、西脇古墳群はその点では群集墳が造られなくなった時期に造られた群集墳といえます。
- (3)小竪穴式石室…棺を横方向の入り口より搬入する横穴式石室に対して、竪穴式石室は、四方に石壁をつくり、箱形にした石室へ上方よ



小型化した横穴式石室(13号墳)

にいるわけです。もちろん、西脇古墳群は畿内中枢部にある古墳群ではありません、畿内縁辺部ともいえる播磨国にあります。もし古墳造営禁止令があったとしても、地方まで威令が届かなかったかも知れません。西脇古墳群の存在をそのように考えることも可能です。しかし、古代山陽道が通り、畿内との交通が密な奈良時代の西脇を考えれば、地方というだけの考え方は要注意です。

7世紀初頭から中ごろにかけて、日本が律令政治へと変化をとげていく。その準備段階の時代に群集墳に何が起こったか、古墳はどうして消えていったのか、西脇古墳群は小さいながらそのカギの一つを握っているといえます。

り棺を入れ、天井石をのせて盛り土をします。古墳時代前期より竪穴式石室は存在しますが、ここに紹介した小竪穴式石室は、7世紀代になって群集墳に使用された小規模な竪穴式石室をさします。従来の竪穴式石室が割り石を積み多量の割り石がひかえ積みを行っているのに対して、小竪穴式石室は構造的には横穴式石室と同じ技法をとっています。西脇古墳群では、小型化した横穴式石室と小竪穴式石室、さらには石棺と小竪穴式石室の構造は非常に似通っています。

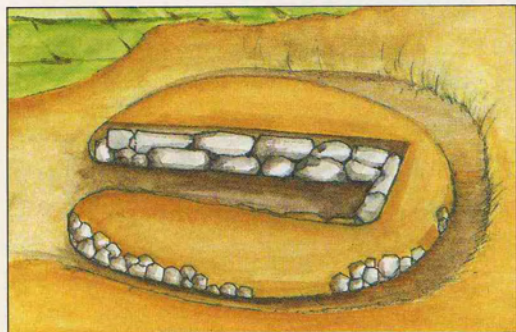
- (4)灰釉陶器…文献資料にみえる「白<sup>しろ</sup>瓦」にあたるもので、尾張・美濃両国の献上品として知られています。灰釉は植物の灰を水で溶かした釉薬を用いたもので、1250℃前後の高温で釉薬は溶けます。この技術は奈良時代後半に出現しました。



## 横穴式石室の造り方

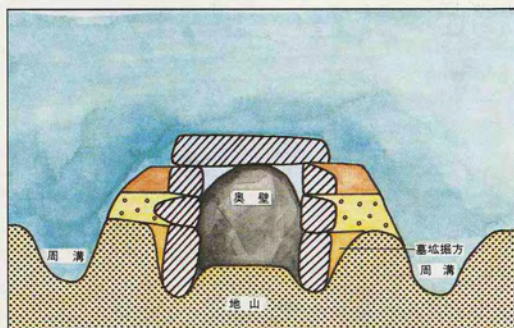
現在のよな土木機械のない時代、石積みから盛り土までほとんどすべて人力で行われていました。おそらく十数人がかりで、2～3ヵ月がかかったと考えられます。では、横穴式石室はどうやって造ったのでしょうか。順を追ってみましょう。

- (1)伐開…山の斜面の樹木をとりさります。この場合、表土を焼く場合もあります。
- (2)墓壇の掘削…次に横穴式石室を造るスペースを箱形に掘りさげます。この場合、しっかりした盤一地山まで掘りさげます。周溝もこの時点で掘り下げたと考えられます。西脇古墳群の場合、周溝は馬蹄形にまわります。さて墓壇と周溝にはさまれた間は地山まで土をはがず、表土が残っている場合があります。7号墳では表土層が断面で確認されました。



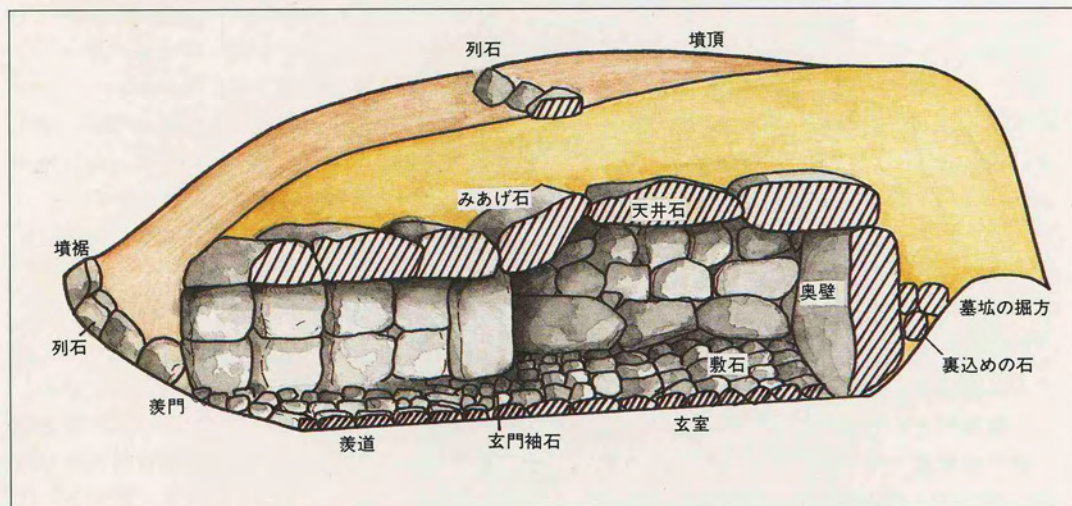
墓坑の掘削と石材の据えつけ

- (3) **石材の据えつけ**…奥壁を据え、側壁の石を置いていきます。石室に袖がある場合、奥壁と袖石を先に置いたと考えられます。
- (4) **裏込めと盛り土**…石室の壁石を一段分置くごとに、その石の頂部まで盛り土を行います。2段目を積むとその高さまでまた盛り土をしていきます。



裏込めと盛り土

- (5) **天井石の架構**…壁石が組みあがると天井石をのせます。この場合、壁が崩れないように石室内に土を充満させ、天井石架構後に排土して天井石を安定させるという手法がとられたとする考え方があります。
- (6) **閉塞石**…天井石の上にさらに盛り土を行い、遺体の埋葬が終わった後、石室の入り口を多数の石でふさぎ、外部より立ち入れないようにします。



### 横穴式石室の構造と名称



## 遺跡散歩

## —西脇古墳群周辺の遺跡—

〈交通機関〉国鉄姫新線太市駅下車、西へ約1.5km

太市・西脇周辺は、『風土記』の邑智里の記載でもうかがえるように古くから開けたところです。周辺遺跡もまた、縄文時代から奈良時代、さらに中世と幅広く存在しています。ただし、点在する遺跡はほとんど未整備の状態で見学には難があります。また交通の便は、バス路線から離れています。

太市駅をおりて道なりに南へ、県道へと出しましょう。太市・西脇を通り、槻坂トンネルを抜けて竜野市内へと入っていくこの県道と、ほぼ同一コースに古代山陽道が通っていたと推定されます。『播磨国風土記』にも記されていますが、太市には駅家（邑智駅家）がおかれ、寺（西脇廃寺）が建てられていたと考えられます。太市の交差点より県道沿いに約500m、道の北側に西脇廃寺、南側の向山布目瓦散布地が邑智駅家跡であったと考えられます。邑智駅家の次の駅家は、布勢駅家。本年度の調査で、「布勢」の墨書、硯、瓦当などの注目すべき遺物が多量に出土した小犬丸遺跡は、駅家跡である可能性が非常に強くなりました。

さて、県道を西へと向かいましょう。約1kmほどいくと、右手に池、左手に丸い小山があります。池のそばの道を北側へたどると西脇古墳群です。古墳が点々と見えていますね。左手の小山の頂上にも箱式石棺をもつ丸山古墳があります。

県道はここより急な坂道となって峠へと向か



太市上空より西を眺む

います。正面に見える峠、槻坂峠は、『播磨国風土記』では、槻折山といわれている山です。古代山陽道もまた、この急な坂を越えて通っていたのでしょうか。現在槻坂にはトンネルが通っていますが、幅がせまく、暗いため、徒歩や自転車でトンネルを通行するには十分な注意が必要です。この槻坂トンネルをぬけると竜野市中井に出ます。三累環頭太刀が出土した中井古墳群は、山陽自動車道建設で、すでに盛り土の下となっています。中井廃寺、瓦窯地は北西の山すそに位置しています。

今度は、槻坂を越えずに、丸山より南へ下っていきましょう。広坂より松田へ歩いていくと、正面に見える小高い尾根が松田山古墳です。竪穴式石室を主体部とする4世紀末から5世紀初頭の円墳で、石室内より、鏡・玉類・銅鏃・鉄剣とともに播磨で唯一の発見例といわれる筒形銅器が出土しました。出土遺物は太子町教育委員会が保管しています。

松田山古墳より西は『風土記』の枚方里・広山里にあたり、広い水田地帯となっています。平方周辺では条里地割がよく残っています。また、地割の境界を示す「勝示石」が東保・福田とともに平方にも現存しています。



周辺遺跡のイラストマップ



## 昭和60年度 発掘調査概要(抄) 一 県教委調査分一

番号	遺跡名	所在地	調査原因	調査期間	調査概要
1	春日・七日市	氷上郡春日町七日市	近畿自動車道 舞鶴線建設	60. 4. 3. ～60. 9.30.	旧石器 始良丹沢火山灰の上下に文化層 ナイフ 形石器など約5000点出土 弥生中期 住居跡 奈良～平安 旧河道から墨書 土器
2	国領	氷上郡春日町国領	"	60. 4. 3. ～60. 9.30.	弥生後期～古墳初頭 住居跡からガラス玉多数出 土 鎌倉～室町 木棺墓・井戸・建物跡・土壇
3	多利古墳群	氷上郡春日町多利	"	60. 7.16. ～60. 8.30.	6世紀前半の尾根上に立地する2基の円墳。埋葬 施設は木棺直葬。刀・施・鉄斧・須恵器出土
4	箱塚古墳群	多紀郡西紀町小坂	"	60. 5.13. ～60. 7.26.	横穴式石室を埋葬施設とする3基の円墳。4号墳 は埴輪列・外護列石巡る。
5	内場山	多紀郡西紀町下板井	"	60. 7.29. ～61. 1.17.	丹波志に記載のある山城で郭・井戸調査。 弥生～古墳 住居跡23棟、木棺墓7基ガラス玉出 土 古墳前期 古墳2基埋葬施設多数。
6	高川古墳群	三田市藍本	"	61. 1.27. ～61. 3.31.	横穴式石室を埋葬施設とする2基の円墳。 銀象嵌太刀出土
7	相野古窯跡群	三田市上相野	"	60.12.16. ～61. 3.31.	平安 須恵器窯跡の確認・全面調査
8	下相野近世窯跡	三田市下相野	"	60.10.21. ～60.12. 9.	丹波焼窯跡灰原の調査。播鉢のみ焼成。
9	西脇古墳群	姫路市西脇	山陽自動車道建設	60. 5.16. ～61. 3.31.	古墳後期～終末 40基以上から成る古墳群。 21基調査10基保存。
10	宮脇 I	竜野市誉田町宮脇	"	60.10. 7. ～61. 3.31.	平安～鎌倉 建物跡、墓、土壇
11	雨流	三原郡三原町榎列	本州四国連絡道 建設	60. 4.16. ～61. 2.28.	古墳中期 住居跡5棟、水田跡。製塩土器出土。
12	玉津田中	神戸市西区玉津町 田中	土地区画整理	60. 5. 7. ～61. 3.31.	弥生中期 住居跡、水田跡、方形周溝墓。多量の 木器・土器出土。
13	芝崎	神戸市西区玉津町 芝崎	国道175号線拡幅	61. 1.20. ～61. 2.14.	古墳前期 ベッドを有する住居跡 鎌倉 漆
14	対中	三田市相生町	三田幹線建設	60. 5.13. ～61. 3. 4.	弥生前期 溝に伴う井堰。石包丁・石製紡錘車出 土。奈良 木組み井戸。
15	青野ダム遺跡群	三田市末西・末東	青野ダム建設	60. 4.15. ～61. 3.31.	古墳前期 住居跡、土壇 鎌倉 建物跡、須恵器窯跡
16	墓山古墳	三田市墓山	国道176号線拡幅	60.10. 1. ～60.10. 9.	6世紀前半の木棺直葬を埋葬施設とする方墳。刀・ 須恵器出土。
17	神大病院	神戸市中央区楠町 7丁目	病院改築	60. 5.20. ～60. 7. 4.	平安末～鎌倉 柱穴、石組み遺構。舶載磁器・瓦 器出土 江戸末 ロストルをもつ窯跡。
18	但馬国府	城崎郡日高町水上	国道312号線バイ パス建設	60.11.19. ～61. 3.31.	平安 溝、石組み遺構。木簡・人形・馬形・扇子・ 墨書土器。
19	長尾・沖田	佐用郡佐用町長尾	県道下庄佐用線 建設	60. 5.20. ～60. 8.23.	弥生中期～古墳初頭 木棺墓・住居跡・建物跡・ 土壇 奈良～平安 道跡。木簡・斎串出土。
20	小犬丸	竜野市揖西町小犬丸	県道竜野相生線 建設	61. 1.20. ～61. 3.14.	平安 道跡、建物跡。木簡・墨書土器出土。